

2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	准教授	大勝 志津穂
最終学歴	学 位	専門分野
中京大学大学院体育学研究科博士課程単位取得退学	修士 (体育)	スポーツ社会学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

演習活動では、地域との連携を重視した実践教育を行う。専門演習Ⅰ・Ⅲではスポーツイベントの企画運営を通して、地域の企業や団体から、信頼される人材を育成する。座学では、様々な視点で物事を見ること、考えることの重要性を享受できるよう、内容を工夫する。実践教育、講義、演習を通して、当たり前のことを当たり前にできる学生を育てる。

(計画)

演習活動では、ドッジボール協会や名東区体育協会、地域の野球指導者やサッカー指導者と関わりをもって取り組む。「TOHO スポーツイベント」は、イベントそのものは継続的に実施できるようになってきたので、学生がより主体的に取り組める状況をつくる。また、4 年次には、体験によって得られた経験を振り返り、学生自身が自らの体験の意義をつなぎ合わせられるように支援する。

○担当科目（前期・後期）

（前期）健康・スポーツ実習、スポーツ社会学、地域とスポーツ、東邦プロジェクトB、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）スポーツマネジメント基礎、生涯スポーツ、東邦プロジェクトA、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

学生が能動的に授業に取り組めるよう、事前事後の課題、授業の資料をネットワーク上に配置し、いつでも見られるようにした。また、ICT を活用し、双方向授業を行った。演習活動では、総合演習はグループ活動を中心に、決めたテーマで情報収集、プレゼン資料の作成・発表を行い、最後は各自でレポートを完成させることができた。また、総合演習、専門演習の学生によってスポーツイベントの運営を無事に実施することができた。さらに、売木村のマラソンボランティアにも参加することができた。4 年生は、各自 1 万字以上の卒業レポートをまとめることができた。

○作成した教科書・教材

ネットワーク上に配置するための学生配布用課題資料及び授業用 PPT 資料の作成。

○自己評価

ICT を活用した授業に挑戦した。スマホを活用した授業方法を今後も検討していきたい。授業の課題や資料を事前にネットワーク上に置くことにより、学生が自ら資料を準備してくる状況を作り出し、予習ができるようにしたことは評価できる。

II 研究活動

○研究課題

競技団体がスポーツ弱者に対して取り組む支援方策や普及・振興戦略

○目標・計画

(目標)

口頭発表 1 回以上、査読付論文 1 本以上、科研費あるいは外部資金の獲得

(計画)

- ・ 8 月の日本体育学会あるいは 11 月の日本生涯スポーツ学会での口頭発表
- ・ 博士論文執筆に向けた研究内容の精査及び中間発表

○2011 年 4 月から 2019 年 3 月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

- ・ 川西正志・野川春夫編著改定第 4 版 生涯スポーツ実践論-生涯スポーツを学ぶ人たちに-12 章 スポーツクラブの現状と課題 [3] 全国的な総合型クラブの管理運営組織の現状 執筆担当. pp. 197-202. 2018 年 4 月 30 日
- ・ 日本スポーツとジェンダー学会編者「データでみる スポーツとジェンダー」3 生涯スポーツとジェンダー 2) ~4) スポーツ推進委員、(公財)日本体育協会公認スポーツ指導者、健康運動士・健康運動実践指導者、(公財)日本レクリエーション協会公認指導者、コラム 2、コラム 3 執筆担当. 八千代出版株式会社 p. 50、pp. 52-61. 2016 年 7 月 2 日
- ・ 大勝志津穂・長谷川望・藤重育子・高間佐知子・小柳津久美子・手嶋慎介・宮本佳範・河合晋「学内外における実践活動を通じた人材育成の可能性」第 6 章執筆担当 『学生の「力」をのばす大学教育-その試みと葛藤』 愛知東邦大学地域創造研究叢書 No. 22 唯学書房 pp. 52-62. 2014 年 11 月 10 日
- ・ 大勝志津穂・長谷川望・藤重育子・高間佐知子・小柳津久美子・手嶋慎介・宮本佳範・河合晋「大学における運動部活動を通じた人材育成-ライフスキル獲得に着目した取り組み」第 1 章執筆担当 『学生の「力」をのばす大学教育-その試みと葛藤』 愛知東邦大学地域創造研究叢書 No. 22 唯学書房 pp. 3-9 2014 年 11 月 10 日
- ・ 山羽教文・長ヶ原誠編著者「ジェロントロジー：身体活動 身体活動世代論」第 5 章 5-3 執筆担当 『健康スポーツ学概論-プロモーション、ジェロントロジー、コーチング-』 杏林書院 pp. 180-187 2013 年 6 月 20 日
- ・ 川西正志・野川春夫編著者「生涯スポーツとニュースポーツ [4] 地域でのスポーツ振興」第 11 章執筆担当 『[体育・スポーツ・健康科学テキストブックシリーズ] 改定第 3 版 生涯スポーツ実践論-生涯スポーツを学ぶ人たちに-』 市村出版 pp. 154-159 2012 年 10 月 17 日

(学術論文)

- ・ 大勝志津穂「うるぎトライアル RUN ボランティア参加者の意識調査-期待度と満足度の比較」2018 年 6 月 東邦学誌第 47 巻第 1 号：pp. 137-144.
- ・ 大勝志津穂・來田享子「成人期以降の集団球技系種目実施者における過去の同一種目経験の影響-笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査 2012」データの二次分析を中心に」2017 年 3 月 生涯スポーツ学研究 13 (2)：pp. 43-54. (査読有)
- ・ 大勝志津穂「マラソンイベント開催による村の地域活性化に関する研究-うるぎトライアル RUN 参加者の支出による検討-」2017 年 6 月 東邦学誌 46 (1)：pp. 39-48.
- ・ 大勝志津穂「うるぎトライアル RUN 完走者の大会評価-大会満足度と自由記述のテキスト分析による検討-」2017 年 12 月 東邦学誌 46 (2)：pp. 177-186.
- ・ 大勝志津穂「運動・スポーツ種目の実施率の男女差について-実施率の時系列変化に着目して-」2015 年 3 月 スポーツとジェンダー研究 13：pp. 56-65. (査読有)

- ・大勝志津穂「平成 26 年度スポーツライフ・データ 2014 (SSF 笹川スポーツ財団) -運動・スポーツ実施レベル別の実施状況-」2015 年 9 月 体育の科学第 65 巻第 9 号
- ・中山孝男・手嶋慎介・大勝志津穂・正岡元・小柳津久美子「2012 年度共同研究：(研究課題)「iPod touch/iPad を利用した教育手法の開発と研究」活動成果報告」2014 年 12 月 東邦学誌第 43 号第 2 号：pp.127-139 (共著：執筆担当 pp.130-131).
- ・大勝志津穂「愛知県における成人女性サッカー選手のスポーツ経験種目に関する研究」2014 年 3 月 スポーツとジェンダー研究 12：pp.31-46. (査読有)
- ・大勝志津穂「プロジェクト実施活動を通じた人材育成の可能性-フットサルイベントの企画・運営の取り組み事例から」2013 年 12 月 東邦学誌第 42 巻第 2 号：pp.173-181.
- ・大勝志津穂「愛知県における社会人女子サッカー選手の活動環境に関する検討」2013 年 3 月 スポーツとジェンダー研究 11：pp.43-56. (査読有)
- ・大勝志津穂「部活動における地域の人材活用方法：名古屋市の部活動外部指導者の取り組みについて」2011 年 6 月東邦学誌 40 巻第 1 号：pp.35-46.

(学会発表)

- ・大勝志津穂・武長理栄「学校運動部活動の種目別活動実態と生徒の希望活動状況-12〜21 歳のスポーツライフに関する調査 2017 の 2 次分析-」2018 年 8 月 日本体育学会第 69 回大会
- ・大勝志津穂・高峰修・伊東佳那子・建石真公子・田原淳子・藤山新・松宮智生・來田享子「性的マイノリティの人権に配慮したスポーツ指導環境の構築にむけた調査報告(1)」2018 年 7 月 日本スポーツとジェンダー学会 第 17 回大会
- ・大勝志津穂・來田享子「現在のスポーツ実施種目に影響する要因-過去のスポーツ経験に着目して-」2016 年 8 月 日本体育学会第 67 回大会
- ・大勝志津穂・來田享子「女性のサッカー人口増加の背景を探る」2015 年 8 月 日本体育学会第 66 回大会
- ・大勝志津穂・來田享子「成人男女の実施種目とスポーツ活動歴との関係-スポーツライフ・データ 2012 の二次分析より-」2014 年 8 月 日本体育学会第 65 回大会
- ・大勝志津穂「運動・スポーツ種目の実施率の男女差について-実施率の時系列変化に着目して」2014 年 6 月 日本スポーツとジェンダー学会第 13 回大会
- ・大勝志津穂・來田享子「愛知県における現役社会人女子サッカー選手のスポーツ経験に関する研究」2013 年 8 月 日本体育学会第 64 回大会
- ・大勝志津穂「女性の生涯スポーツプロモーション-競技系種目について」2012 年 12 月 東海体育学会シンポジウム
- ・大勝志津穂・來田享子「愛知県における現役社会人女子サッカー選手の活動環境に関する検討：地域における生涯スポーツとしての女子サッカーの展望」2012 年 8 月 日本体育学会第 63 回大会

(その他)

- ・大勝志津穂・來田享子「中央競技団体が取り組む女性のスポーツ振興戦略に関する基礎的研究」2019 年 3 月. 中京大学体育研究所紀要.
- ・大勝志津穂「誰と運動やスポーツを実施しているのか？」2019 年 3 月. スポーツライフ・データ 2018-スポーツライフに関する調査報告書.
- ・大勝志津穂「スポーツ指導に必要な LGBT の人々への配慮に関する調査研究-第 2 報-スポーツ団体のジェンダー課題等への取り組みについて」2019 年 3 月. 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告.
- ・大勝志津穂「スポーツ指導に必要な LGBT の人々への配慮に関する調査研究-第 1 報-第 7 章「日

体協指導者資格保有者の経験と課題～「スポーツ指導者に求められる指導上の配慮に関する調査について」～」 7-1 調査概要及び単純集計結果. 2018 年 3 月. 日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 I.

- ・大勝志津穂「中学校・高等学校の学校運動部活動の活動実態：種目別による比較」2017 年 12 月. 子ども・青少年のスポーツライフ・データ 2017-調査報告書：pp. 43-48.
- ・大勝志津穂「現在の実施種目からみる過去のスポーツ経験と今度の希望」2016 年 12 月. スポーツライフ・データ 2016-スポーツライフに関する調査報告書：pp30-34.
- ・大勝志津穂・来田享子「現在のスポーツ実施種目に影響する要因-過去のスポーツ経験に着目して-」2016 年 8 月. 日本体育学会第 67 回大会体育社会学専門領域発表論文集 24 号：pp. 72-77.
- ・大勝志津穂「子どもの運動・スポーツ実施とジェンダー～高頻度（週 7 回以上）実施者の特徴～」2015 年 12 月 青少年のスポーツライフ・データ 2015-10 代のスポーツライフに関する調査報告書：pp22-27.
- ・大勝志津穂・来田享子「女性のサッカー人口増加の背景を探る」2015 年 8 月 日本体育学会第 66 回大会体育社会学専門領域発表論文集 23 号：pp. 147-152.
- ・大勝志津穂・来田享子「成人男女の実施種目とスポーツ活動歴との関係-スポーツライフ・データ 2012 の二次分析より-」2014 年 8 月 日本体育学会第 65 回大会体育社会学専門領域発表論文集 22 号：pp. 24-29.
- ・大勝志津穂・来田享子「愛知県における現役社会人女子サッカー選手のスポーツ経験に関する研究」2013 年 8 月 日本体育学会第 64 回大会体育社会学専門領域発表論文集第 21 号：pp. 135-140.
- ・大勝志津穂・来田享子「愛知県における現役社会人女子サッカー選手の活動環境に関する検討：地域における生涯スポーツとしての女子サッカーの展望」2012 年 8 月 日本体育学会第 63 回大会体育社会学専門領域発表論文集第 20 号：pp. 186-191.

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・科学研究費助成 平成 30 年度（2018 年度）基盤研究（C）「スポーツ競技団体におけるジェンダー平等を実現するための取り組みに関する研究」申請
- ・科学研究費助成 平成 29 年度（2017 年度）基盤研究（C）「スポーツにおける社会的弱者に対する中央競技団体が取り組む戦略に関する研究」申請 不採用
- ・2017 年度笹川スポーツ研究助成「大学資源を活用した地域スポーツクラブ設立に向けた実証研究-子ども達のスポーツ・プラットフォームづくりについて-」申請 不採用
- ・科学研究費助成 平成 28 年度（2016 年度）基盤研究（C）「体力・運動能力の二極化現象に影響する「子どもの貧困」に関する研究」申請 不採用
- ・科学研究費助成 平成 27 年度（2015 年度）若手研究（B）「スポーツにおける「ジェンダー平等推進と女性の地位向上」に向けた支援方策について」申請 不採用
- ・科学研究費助成 平成 26 年度（2014 年度）若手研究（B）「生涯スポーツ社会のあり方を検討するための“草サッカー”の実態調査に関する研究」申請 不採用
- ・科学研究費助成 平成 25 年度（2013 年度）若手研究（B）「競技団体が牽引する女性の生涯スポーツプロモーションに関する研究」申請 不採用
- ・公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ研究助成（2013 年度）「競技団体が行う女性の生涯スポーツプロモーションに関する研究」申請 不採用

○所属学会

日本体育学会体育社会学専門分科会、日本生涯スポーツ学会、日本スポーツ社会学会、日本スポ

ーツとジェンダー学会、イベント学会

○自己評価

口頭発表を2回実施することができたことは評価できる。また、博士論文を12月に提出できたことは、これまでの研究成果として評価できる。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

(目標)

学生委員として、強化指定クラブやクラブの本学での位置付けを明確にする。スポーツ音楽奨学生について、入り口から出口までのあり方を考える。奨学金制度の見直し。

経営学部執行部として、経営学部の特色の出し方を検討しながら、各コースの魅力・打ち出し方を検討する。また、経営学部の学生確保の方策（特に女子学生）を検討する。

(計画)

本学における強化指定クラブ、クラブの位置付けを明確にするとともに、支援のあり方を検討する。「スポーツ」に関わる資源をどのように活用するのか、施設開放、人材派遣、知識提供など様々な関わり方ができるはずである。日本の大学スポーツのあり方の変化を見ながら、本学が取り組める方法を検討する。奨学金制度として、入り口のスポーツ音楽奨学生だけでなく、学業での奨学生、入学後の活躍による奨学生制度など新たな奨学金制度を検討し、学生がより積極的に学業や課題活動に取り組めるようにする。

○学内委員等

経営学部執行部、学生委員会委員、女子サッカー部顧問（監督、強化指定クラブ）

○自己評価

経営学部執行部として、会議の議題書、資料、議事録の作成を実施した。また、新規教員採用の業務、2020年に向けた新カリキュラムのあり方、経営学部の進むべき方向性などについて執行部と議論できた。学生委員としては、学生会の支援を行なった。毎月、学生会メンバーと話し合いの時間を持ち、大学祭のあり方やその他のイベントについて議論することができた。

Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

(目標)

名東区体育協会との連携事業の推進。幼児・小学生・中学生へのスポーツ環境の提供。2018年度東海体育学会本学開催。

(計画)

本学が持つスポーツに関わる資源の有効活用を目指し、名東区、名東区体育協会、愛知県サッカー協会、東尾張サッカー協会との連携を強化する。愛知県サッカー協会と連携して、小学生から中学生にサッカーの環境を提供する。今年度10月、本学で東海体育学会を開催する。

○学会活動等

日本スポーツとジェンダー学会幹事、日本スポーツとジェンダー学会編集委員、笹川スポーツ財団研究員、中京大学体育研究所所員、愛知東邦大学地域創造研究所所員、愛知県サッカー協会女子委員会総務委員

○地域連携・社会貢献等

- ・ 東海女子サッカーリーグ運営委員長として、東海女子サッカーリーグの運営を行った。

- ・ 愛知県サッカー協会総務委員として、協会主催のフェスティバルの管理運営業務を行なった。
- ・ 東海体育学会実行委員会において事務局長を務め、無事に大会を開催した。
- ・ 新川大学講座 学問の楽しさを知ろう「スポーツを取り巻く社会環境について」講師（2018 年 10 月 25 日）
- ・ 第 5 回野球教室 企画・運営（2018 年 7 月 14 日）
- ・ 第 6 回トーくん・ホーちゃん杯争奪ドッジボール大会 企画・運営（2018 年 7 月 29 日）
- ・ 名古屋グランパス連携企画 第 5 回ガールズサッカーフェスティバル開催（2018 年 8 月 18 日）
- ・ 第 3 回うるぎトライアル RUN 運営ボランティア（2018 年 10 月 6 日、7 日）
- ・ 第 6 回 TOHO 少年サッカー大会-8 人制- 企画・運営（2019 年 1 月 20 日）
- ・ 愛知県サッカー協会女子委員会、東尾張サッカー協会との連携事業 小学生女子のサッカースクール企画・運営（年間 12 回開催）

○自己評価

女子サッカーの普及事業が定着してきた。2018 年度から中学生のクラブチームも発足し、本学を中心に小学生から大学生までの女子サッカーの環境が整いつつある。少しずつこの活動を広げ、定着させていきたい。また、演習活動を中心にスポーツイベントも継続して実施できた。特に、ドッジボール大会については、300 名近い参加者を集めており、大学周辺の小学生たちに試合経験のできる場を提供できている。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

- ・ 学位取得に向けた準備
- ・ 笹川スポーツ財団研究員として全国調査に関わる
- ・ 日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究受託研究

VI 総括

2018 年度は経営学部執行部として、学部のあり方を考える機会が多くあった。2020 年度以降の経営学部の方向性について、2019 年度も引き続き議論し、魅力ある学部になるように努力したい。私自身の授業は、受講生が比較的少ないので、学生がより能動的、学生同士が考えられるような授業展開を考えたい。研究については、ようやく博士論文を仕上げ提出するところまでたどり着いた。2019 年度中に修正等を行い、完成させて博士号を取得する。一方、博士論文にかかる時間が多かったため、今年度は査読付き論文に投稿することができなかった。しかし、口頭発表を 2 回、研究に関する報告書を 3 つ書くことができたので一定の評価はできる。

以 上